

大英博物館所蔵 スタイン将来
漢文々書 第五三〇八号

敦煌發見神人所說三元威儀

觀行經斷簡と大比丘三千威儀

秋 月 觀 暎

はじめに

今日道藏に収められる道教經典は、明藏白雲觀本影印の所謂上海版道藏、及び新らたに清末、二仙庵重刊の道藏輯要に収録された經典、合せて約一五〇〇部、五五〇〇卷以上の数に達するのであるが、これら尠大な数にのぼる道經中、その来歴の明確なものは極めて僅かであり、撰述者は勿論、成立の時代すら明瞭でないものが大部分を占めている。重刊道藏輯要の編者が、その凡例に道書を評して「真偽参わり半ばし」「真膺雜じり陳らなる」と述べていること⁽¹⁾は、道經の詭偽に関して、従来外部から加えられてきた幾多の非難が、必ずしも為にする誹謗のみでなかったことを自ら物語るものと解せられる。

六朝以来、国家権力を差し挟んで烈しく対立してきた道仏兩教団の確執の中には、自からこの点を繞る論争が繰返えされており、集古今佛道論衡^(丁卷)に「道士の諸經唯老莊あり、餘は皆偽誑佛教を偷竊して、縦横に安置せるものなり」と云う仏家の誹議に対して、道家が「道人また譯經を浪たり、白馬に據って經を將くる。唯四十二章あり、餘は

並びに道人の偽作なり」と応酬する論議はその代表的なものと云えよう。⁽²⁾ たゞこの際における道家の反論の根據にはいさゝか正鵠をえざるものゝあることを否定し難いが、仏家もまた道教から多くのものをんでいることは、疑いのない事実であつて、敦煌出土の經典は勿論のこと、現行諸大藏經中にも明らかに道教々理の剽竊になる所謂偽作經典が決して少くないのである。⁽³⁾ この様な事實は、今日道藏並びに大藏經に収められる膨大な經典が、中国において蓄積されてゆく過程に惹起された相互の影響が、予想外に甚大なものであつたことを想定せしむるものがある。

されば、冒頭に指摘せる曖昧な道教經典の來歴を説明する最も有力な手懸りの本筋は、斯くの如き道仏經典の成立關係の中に求められるのであつて、両教經典の錯雜せる諸關係を、明確なる訳出及び傳承の來歴を備える仏教經典に據つて解きほぐし、これを箚い分けることによつて道教經典の眞實を判別し、且つその來歴を説明するための核実を把握することが可能な筈である。小論はこの様な観点に立つて、大英博物館所藏スタイン將來漢文々書第五三〇八号「神人所說三元威儀觀行經」の斷簡を紹介するとともに、仏典「大比丘三千威儀」との關係を明らかにし、これに若干の所見を加えんとするものである。なお小論がさゝやかな基礎的研究に加えて、原典資料の掲載に多大の紙面を割いた所以のものは、今日著しく立遅れの中にある道教研究が当面している道藏整理の基本的課題に対し、一掬の寄与を致さんとする微意に外ならない。

一

さてこゝに紹介する神人所說三元威儀觀行經^(以下觀行經の略称を用いる)は云う迄もなく道教の威儀經典である。本来威儀の語は古く禮記中庸に所謂「禮儀三百、威儀三千」の經文に発するものゝよう⁽⁴⁾で、仏教はこれ採つて「皆以行住坐臥名

威儀、其他動止、皆四所攝」と釈し、これを承けてか道教もまた威儀を「具示齋戒、闕進退楷模、俯仰節度、軌式容止」と説いている。⁽⁶⁾断簡によって窺われる観行經の内容もこれに違わず、叢林中における道士の行住・進退・坐臥、生活全般に関する詳細な修道規範である。現行道藏威儀類に収められる經典約二五〇部中、威儀の名を掲げるものは五部に過ぎないが、観行經はその規範の詳密を極むる点において遙かに懸絶し、道藏中これに比すべき經典を見出し難い。従って整然たる清規の完成を見る宋代以前の道教々団にとって、⁽⁷⁾観行經は叢林生活の指導規範として極めて重要な所依の經典であつたものと推測されるにも拘らず、如何な理由か、現行道藏を通じて「神人所説三元威儀觀行經」なる經典は存在せず、却つて闕経目錄中にこれに擬すべき「洞玄靈寶三元威儀境行經四卷」を見出しうるのであつて、⁽⁸⁾観行經が既に散逸せる蔵外經典の断簡であることは、断定してはゞ誤りのないものと考えられる。⁽⁹⁾

ところが奇妙なことに、この観行經断簡と殆んど同一の内容をもつ經典が大藏經の中に発見される。即ち大正大藏を以て云えば、第二十二卷律部所収「大比丘三千威儀」の末尾の部分は、観行經断簡と構成上全く同一の形態を有するのみならず、内容的にも完全に一致する部分が少なくないのである。この点は道教經典史並びに道仏交渉史研究の上からも頗る注目する事実であろう。以下、観行經断簡の全文を紹介すると共に、大比丘三千威儀^(三千威儀の略称を用いる)中よりこれに対応する項目及び諸条項を選択して両經典を対照して見よう。なお対照表は、両經典の比較の便宜を考慮し、各条項を切離して行を改めた。また断簡を通じて多くの異字・缺脱、及び形訛・誤脱と思われるものが少なからず見出されるが、異字については印刷の都合上、質疑の余地を残さぬものに限って、例えば土を土*、佐を作*の如く傍点を付して通行字に改めたまた。形訛・誤脱、及び缺脱については、対照表面の混雑を避けて一応その儘としたがいづれ□をもつて示した判読困難の箇所と共に、稿を改めて補訂を加える予定である。⁽¹⁰⁾

对照表 神人所說三元威儀銀行經斷簡

(1) 道士□□□□□□□□□□事、何等為廿二

一者手不淨、不得捉

二者手不淨、不得捉上蓋*

三者手不淨、不得前捉口

四者手不淨、不得使益水

五者手不淨、不得捉持頸

六者當□□□□□

□□□□少且當洗使淨

八者當出益水

九者欲益水、先藻外三洗令淨

十者欲瀝水、當三例易水滿持入

十一者欲持入不得當道住

十二者安着屏處*

十三者常當使有楊枝*

十四者安之當正上蓋*

□□□□□□□□□□

□□者持藻槃、不得使相着有聲

十七者不得使上邊汙

十八者不得使中有飯

十九者棄不淨水

廿者棄水不得速手徐寫之

大比丘三千威儀

比丘持寶鍵澡槃、有二十五事

一者手不淨、不得摸上飾手

二者手不淨、不得摸上蓋

三者手淨、不得摸前口

四者手不淨、不得使益水

五者手不淨、不得摸前頸

六者當從下捧腹

七者水少但當少洗手使淨

八者當出益水還入善澆

九者欲益澡水、當先澆水三洗令淨

十者欲著水、當三倒易水滿持入

十一者欲持入不得當道住

十二者安著屏處

十三者下常當使有枝

十四者安正上蓋

十五者當宿盛水令滿

十六者持澡槃不得曳有聲

十七者不得使上邊汙

十八者不得使中有飯

十九者棄不淨水

二十者棄水不得遠手徐徐瀉之

廿一者澡槃當先澡內外□□

□□□□□□□□手不得、不得中止持漱口

(2) 道士常用手巾有五事、何等為五

一者當拭上下頭

二者當用一面拭手、以一頭拭面目

三者不得拭鼻

四者以用拭膩汗當即浣

五者不得以拭身體、若沐浴各當自有異巾

(3) 道士為衆知事人、有十二事、何等為十二

一者用法教

二者□衆□

三者當知衆事

四者不得□□□□□□□□

二十一者澡槃當先澡內外使澡淨

二十二者持澡槃手不淨、不得中止持漱口

三十三者持澡槃手污、不得撲賓健上拭若口

二十四者不得取竈下水用撲賓健

二十五者中外各當三更水澡乃得持入、欲持賓健著槃中、不得大投使有聲

當用手巾有五事

一者當拭上下頭

二者當用一頭拭手、以一頭拭面目

三者不得持拭鼻

四者以用拭膩污當即浣之

五者不得拭身體、若澡浴各當自有巾

鉢泥僧摩波利、有十五德

一者用佛故

二者用法故

三者用比丘僧故

四者當惜衆物

五者當惜招提僧物

六者當惜比丘僧物

七者當知佛事

八者當知招提僧事

九者當知比丘僧事

十者不得持塔物著招提僧物中

五者欲有所作、當自報衆

六者不得割截衆物獨匿自入

七者不得持衆人物私意饒益親厚、不得斷取衆物以匿施用作名字勝上、當數新理衆家臥具

□□□□□□□□□□視隨所思得與之、老者常

恭敬瞻視衆亦當監令作食每使潔淨

九者當營隨衆所樂食

十者不得坐自瞋喜

十一者欲行清淨、不得露身

十二者日暮常自□□□□門戶

復有十五德

十一者不得持塔物著比丘僧物中

十二者不得持招提僧物著塔物中

十三者不得持招提僧物著比丘僧物中

十四者不得持比丘僧物著塔物中

十五者不得持比丘僧物著招提僧物中

一者欲有所作、當白報衆人

二者不得割奪衆物獨匿自入

三者不得持衆人物私意饒益親厚

四者不得斷取衆家物以匿施用作名字

五者當數護理衆家臥具

六者若有病痛當占視隨所思持與之

七者當恭敬瞻視比丘僧

八者為比丘僧作飯食當令淨潔

九者當隨姿羅門意

十者譬如事鬼神無有異

十一者不得自瞋喜

十二者欲行清淨不得露身於簾下作事

十三者日暮常當自起按行門戶、視諸比丘戶皆閉、

不設見異人、不得即呵問言、卿為是沙門、許

當復待明日

十四者不得掃寒著熱

十五者不得掃熱著寒

(4) 道士飯於堂中行十三事、何等^{*}為十三

一者有所分布皆當白衣
二者有所布皆當始學

三者平等^{*}行之

四者分羹先三迴汁乃斟、令汁滓調

五者有所分不得於上語笑

六者不□□□□□□□來

七者衆中不食羹者、為取所便與之

八者若衆中不相便可者、不得即於坐中呵之^{*}

九者急當念養病

十者飯時人持物來、當即分布盡之、不得言當遺

□□□□□□□羹

十二者急當益中飯盡者不

十三者當視所不具

營事維那、飯時於堂中當行 二十五德

一者已布空案、當自身行遍視下竟皆遍淨不

二者不得先布空案

三者上座已有應分飯

四者一切有所分布、皆當至沙彌若白衣受

五者三師在中不得持增益

六者作分上下當使平等

七者分飯自當更手令平

八者欲分羹當三迴杓乃斟

九者令計滓調

十者不得即以釜中羹著人鉢中、皆當先更分著器中

十一者所有分不得於上語笑

十二者不得遙大呼言取某來

十三者衆中有不食羹者、為取所便與之

十四者若衆中有不相便可者、不得即於坐中呵罵

十五者急當念養病

十六者飯時人持物來、當即分布盡之、不得言當遺後日

十七者急先益羹

十八者急當益中飯盡

十九者不得中止踞視僧

二十者不得遠離僧於前捨出

二十一者皆已飯、當自視中所不具者、復視多少益

(5) 道士於竈下有十九事、何等為十九

一者盡力忍辱

二者若人從有所索、有即當与、不得逆言無有

三者□□□□具不

四者一切使人行、若有所買、不得追走

五者若欲呼使人行、若有所買、不得追走

六者若欲呼使人、不得遙大作聲呼

七者一切有所作、不得使物器有□

□□□□□□衆人意不得自在

九者汲水不得大投瓶井令水濁

十者不得自擇米

十一者澡釜三易水令淨

二十二者不得住大呼從人檢校食具去

二十三者蓋藏無令有聲捐棄著地

二十四者當教人豫具掃帚水手巾

二十五者當住待僧達觀竟、自當白畢竟乃出去

竈下有二十五德

一者為鉢泥僧盡力忍辱

二者當佛法行敬等視上下

三者若人從有所索、有即當一切與、不得逆言無有

四者當早起行視當一切具

五者一切使人行、若有所買不得施乞之

六者欲呼使不得遙大作聲呼

七者一切有所作、不得使物器大有聲

八者一切當可衆人意、不得自在直行強

九者若人持飯來若餘物多少、即當白衆人使達觀、

不得獨受便遣令去

十者即分布令遍、設使過時當藏棄不得便先當視

十一者若檀越來言欲作飯、未見所有、不得即對人

說、若主人持錢來、作比丘僧飯、若鉢泥僧與主

人、若白賢者、共議所當兩作、不得獨自可

十二者汲水不得大投瓶井中令水濁

十三者不得自擇米

十四者澡釜三易水令淨

十二者勿持釜中熱湯澆瀆中
十三者不得自炊

十四者不得□□□□□□□□

十五者不得以生菜根棄著火中

十六者不得持飯瀉瀆中

十七者一切食具皆覆上不得使受塵

十八者不得持衆物倚身以作思惠

十九者不得分今日食□□□□

(6) 道士有七事、待新至道士、何等為七

一者來至即當問消息

二者當為次坐上下

三者當給與房室

四者當給與臥具被枕

五者當給與燈火

六者當□□□□□□□□

七者當語國土習俗

(7) 道士使人市買有九事、何等為九

一者當教買淨

二者莫使侵人

十五者勿持釜中熱湯澆瀆中
十六者不得自然竈

十七者不得自掃生草斷去根

十八者不得以生菜根棄著火中

十九者不得持食飯注瀆中

二十者一切飯具當覆上、不得使受塵

二十一者不得教人作長分、設僧不食當自置棄之

二十二者不得持衆物倚身以作思惠

二十三者盡藏自當行視令堅

二十四者不得分今日食遺旦日

二十五者不得持旦食遺今日

有七事以待新至比丘

一者來至即當問消息

二者當為次座上下

三者當給與房室

四者當給臥具被枕

五者當給與燈火

六者當語比丘僧教令

七者當語國土習俗

教人市買有五事

一者當教莫與人

二者當教買淨者

三者莫使侵人

三者不忘走捉人
四者當獲人意

□□□□二價

六者不得俠情貴賤

七者不得因市別處遊行

八者不得以所買物置不淨處

九者當念與人作市無殆慢心

(8) 道士教人汲水□□□、何等為五

一者當使先淨澡器

二者當使著屏處

三者當覆上令淨

四者不得持膩汚

五者若人以滂不得復用

(9) 道士教人破薪□□□□等為五

一者莫當道

二者先視斧柄令堅

三者不得破有青草薪

四者不得妄破衆家材柱

五者積著燥處

(10) 道士教人擇米有五事、何等為五

一者當自量視多少

二者不得有草

四者不得走促人
五者當護人意

買肉有五事

一者設見肉完、未斷不應便買

二者人已斷余乃應買

三者設見肉少不得盡買

四者若肉少不得妄增錢取

五者設肉已盡、不得言當多買

教人汲水有五事

一者當使先淨澡器

二者當使著屏處

三者當覆上令淨

四者不得持膩汁汚

五者若人有汚不得復用

教人破薪有五事

一者莫當道

二者先視斧柄令堅

三者不得使破有青草薪

四者不得妄破塔材

五者積著燥處

教人擇米有五事

一者當自量視多少

二者不得有草

三者擇去鼠屎

四者不得令有穢

五者向淨地

(11) 道士教人洗米有□□、何等為五*

一者當用堅器*

二者用淨水

三者五易水令淨

四者內著屏處

五者覆上令密

(12) 道士教澡釜有五事、何等為五

一者不得持水大撞釜底*

二者當□盈器受汚水出棄之*

三者當滿水

四者淨澡水蓋覆上

五者暮覆之當令堅

(13) 道教人莊米有五事、何等為五*

一者當教待氣出所莊

二者當隨氣上米稍稍炊之

三者安正甑不得令氣洩

四者著米甑中當隨覆上

五者已熟下之、亦當覆上莫使露

(14) 道士使人擇菜有五事、何等為五*

一者當去根

三者擇去鼠屎

四者不得令有穢

五者向淨地

教人洗米有五事

一者當用堅器

二者用淨水

三者五易水令淨

四者內著屏處

五者覆上令密

澡釜有五事

一者下得持汁大衝釜底

二者當使盞器受汚水出棄之

三者當添滿水

四者淨澡木蓋覆上

五者日暮覆上看令堅

教人炊米有五事

一者當教待氣出而莊之

二者隨氣上米稍稍炊之

三者安正甑不得令氣泄

四者著米甑中當隨覆之

五者已熟下之、亦當覆上莫使露也

擇菜有五事

一者當去根

二者當令等*

三者不得令青黃合

四者當使潔淨

五者皆當著淨處

(15) 道士教人作羹有五事、何等為五*

一者當教如次內物

二者令孰

三者令味調

四者當自觀令淨潔

五者已熟當去下火露之

(16) 道士掃觀中有七

一者當先灑地

二者當使調

三者當待燥

四者不得逆掃

五者不得逆風掃

六者當以手拈中草去

七者當取中土轉著下處*

(17) 諸道士應會有五事、何等為五*

二者當令等

三者不得令青黃合

四者當使潔淨

五者皆當令向火知之乃得布用

作羹有五事

一者當教如次內物

二者當令孰

三者令味適

四者當自視令淨潔

五者已熟當去下火覆之

掃塔下有五事

一者當先灑地

二者當使調

三者當待燥

四者不得逆掃

五者不得逆風掃

掃除又有五事

一者不得去墻土

二者當自手拾草

三者當取中土轉著下處

四者不得令四角掃處有迹

五者掃塔前六步使淨

設大比丘僧會時、掃除講堂中有七事

一者當早起行視門戶開未

二者當堂檢空燈內之

三者當拭案檢

四者當燒香

五者當作大燈火着法堂中

(18) 道士灑地有五事、何等為五

一者當却行

二者當輕手

三者當令遍

四者當待燥

五者不得滂人衣

(19) 道士掃地有五事、何等為五

一者不得背經

二者不得大掉手汚人足

三者不得掃去土

四者當自手徐出棄之

五者不得當人道、亦莫棄水棄清中

(20) 道士顯然燈有五事、何等為五

一者當持淨布掃中外令淨

二者當作淨炷

三者當自作麻油

一者當早起行門戶開未

二者當檢空燈當擗之

三者當掃拭佛像去前宿花

四者當燒香著佛前

五者當作大燈火著堂中央、却正比丘僧坐席

六者僧比丘事畢去徐當灑地

七者當更淨掃地

有五事灑地

一者當却行

二者當輕手

三者當令遍

四者當待燥

五者不得灑人衣

掃塔地有五事

一者不得背佛

二者不得不掉手汚人足

三者不得去墀土

四者當自手徐出棄之

五者不得當人道、亦莫棄水中及圍中

燃燈有五事

一者當持淨巾拭中外令淨

二者作淨炷

三者當自作麻油

(21)

道士為衆知一年、任事有九事、何等為九

一者為三寶盡力

二者若有道士從方來當迎安隱

三者當給與牀席若燈火三日至七日

四者設戶皆滿、常自避持處與之

五者當數往問訊占視

六者當為說國土習俗

七者當憂所不具足者

八者若中有共爭者、不得有所助、常當和解令安隱

九者若宿與不相便安、不得於衆中呵罵

(22)

道士為小知事有廿事、何等為廿

一者欲鳴磬當先視早晚

二者常當報上坐日

三者常當須待主人視食具未

四者當令衆人意

五者當次諸道士坐處、不得數起

直歲有十德

一者為三法盡力

二者有比丘從遠方來當迎安隱

三者當給與床席若燈火三日至七日

四者設房皆滿、當自避持處與之

五者當數往問訊占視

六者當為說國土習俗

七者當憂所不具足

八者若中有共諍者、不得有所助、常當和解令安隱

九者若宿與不相便安、不得於衆中呵罵、亦不得呼

人使共作某令主不可

十者不得與摩波利共淨求長短、數於衆中若行說之

亦不得取三法中所有物持行作恩惠、如法行者可

作直歲

復有五事

一者撻鍵椎時當先視早晚

二者常當報上座

三者當復待檀越視殷泥僧具未

四者當可衆人意

五者當次僧坐處、不得數起僧

復有五事

六者不得正對衆坐*

七者先自彈劾*

八者語且須人意

九者白事不得增減人語

十者若有所分皆當調等*

十一者若衆中有不如法者、不應便自於衆中呵罵

十二者不得違衆正令

十三者不得數出行動

十四者事畢當從衆誨若語言不可分布不等乞余罪

十五者白帔已不得先出去

十六者朝暮當行觀病瘦

十七者當日行問訊上坐諸大人

十八者當時往至篤信主人家勞問

十九者若有遠行諸道士來當安隱之

廿者若同學中有命盡者、當占視遠送之

(23) 道士踞坐有五事、何等為五

一者不得交足

二者不得雙前兩足*

三者不得却隱*

四者不得支柱一足*

五者不得上下足

一者不得正對僧坐

二者不得先自檀罰人

三者語但順人意

四者白事不得增減人語

五者若有所分皆當調等

復有五事

一者若僧中不如法者、不應便自於衆中呵罵

二者不得違僧正令

三者不得數捨僧出妄行

四者事畢當從僧悔、若語言不可分布不等乞除罪

五者白彼已不得先出去

復有五事

一者朝暮當行視病瘦

二者當日問訊上座諸大人

三者當時往至檀越家勞問

四者若有遠許比丘來當安隱之

五者若同學中有命盡、當占視遠送之

踞坐有五事

一者不得交足

二者不得雙前兩足

三者不得却踞兩手掉掉兩足

四者不得支柱一足申一足

五者不得上下足

(24) 道士淨住有十四事、何等為十四

一者不得祖軀入衆

二者不得著屐入衆

三者不得當講堂戶中住觀諸士

四者不得踞戶外聽諸道士語

五者不得住戶中大呼坐上人

六者設講堂戶已閉、不得排開急入

七者當低頭從上至下坐*

八者不得排奪人處

九者勿道說外因緣

十者已安坐、不得語諸道士今日會何太早

十一者衆議事不得亂語

十二者不得妄唾前地

十三者不得持手捧膝

布薩時入衆有五事

一者不得著鞦韆入衆

二者不得拄錫杖入衆

三者不得持入竹扇持白手巾入衆

四者不得白履入衆

五者不得著屐入衆

復有五事

一者比丘僧會、不得但著袈裟入行衆中

二者不得當講堂戶中觀僧

三者不得踞戶外聽僧語

四者不得住戶中大呼留上人

五者設講堂戶已閉、不得排開、急欲入當三彈指

復有五事

一者已讀經戒、不應復作禮

二者當低頭從上下至坐

三者不得排奪人處

四者勿道口說外因緣事

五者已安生、不得語比丘僧、今日會何太早

復有五事

一者衆人議事不得戲語

二者不得妄唾前地

三者不得持手捧膝

四者不得持手捧頭睡臥

(25)

十四者不得張口
道土至舍後有廿五事、何等為廿五

一者欲大小便當行

二者行時不得道為某事、亦勿為上坐作礼、亦勿

受入礼

三者往時當直低頭視地

四者往當三警嗽

五者上已有人嗽不得迫

六者已上正警嗽乃踞

七者正踞中

八者不得一足前一足後

九者不得令身倚

十者斂衣不得使垂圍中

十一者不得大咽使面赤

十二者當直視前不得顧聽

十三者不得汚地

十四者不得低頭視圍中

十五者不得視陰

十六者不得以手持陰

十七者不得畫地作字

十八者不得以草畫壁作字

十九者用水不得大費

廿者用水不得汙滿

五者不得大張口欠
至舍後、有二十五事

一者欲大小便、當行時不得道上為上座作禮

二者亦莫受人禮

三者往時當直低頭視地

四者往當三彈指

五者已有人彈指不得逼

六者已止往三彈指乃踞

七者正踞中

八者不得一足前一足却

九者不得令身倚

十者斂衣不得使垂圍中

十一者不得大咽使而赤

十二者當直視前不得顧聽

十三者不得唾汚四壁

十四者不得低頭視圍中

十五者不得視陰

十六者不得以手持陰

十七者不得持草畫地作字

十八者不得持草畫壁作字

十九者用水不得大費

二十者不得汚濺

廿一者用水不得使前手著後手

廿二者用土當三過

廿三者当用澡豆

廿四者三過水

廿五者設見水草土盡當語直日主者若自手取為善

二十一者用水不得使前手著後手

二十二者用土當三過

二十三當澡豆

二十四者三過水

二十五者設見水草土、盡當語直日主者、若自手取為善

神人所說三元威儀觀行經 第二

大比丘三千威儀 卷下

二

斯くの如く対照することによって、觀行經と三千威儀との間に、極めて近い縁親の關係のあることが、容易に看取されるものと考えるが、両者の間に存する異同を更に分析することによって、兩經の具体的な關係を明らかにしてみよう。まづ前掲対照表において対比される二十五の項目毎に、両者の異同を比較検討するに、兩經の關係は全般的に共通して見出される二つの相違点、即ち僧職者を道士と称し、また比丘と呼ぶ道仏教団の慣用稱謂の相違、及び各項目首句において認められる表現・形式上の相違を除くほか、唯一つの例外を残して、概ね次の如き三つの關係に整理することが可能である。

第一類 兩經の各条項の間にほぼ完全な一致が認められるもの。

第二類 兩經の間に完全に対応する条項を存しながら、その一部の条項に若干の相違——改換・節略——が認められるもの。

第三類 觀行經に顕著な缺略——要約・削除——が認められるもの。

以下この分類に従い、それぞれ具体的な例証を挙げつゝ説明を加えよう。まづ第一の關係を示す適切な事例は、前掲対照表の(6)即ち觀行經の「道士有七事待新至道士」と、三千威儀の「有七事以待新至比丘」の項目に纏められている五つの条項の間に見出されよう。即ち両者は最初に指摘した二つの共通する相違点を除外して、ほぼ完全な一致を示しており、觀行經の「六者」以下の爛佚も、当然三千威儀の「六者當語比丘僧教令」の規定によって「六者當語道士教令」と補足しうるものと考えられるが、微かに残る墨蹟の端片は、この補訂の誤りでないことを保証して疑念を残さしめない。⁽¹⁾このように兩經の間にほぼ完全な一致が認められるものには、このほか前掲対照表中の(2)(12)(13)(15)があり、更に条項において一字の相違もなく完全な一致を示すものには(8)(10)(11)(16)(18)(20)を挙げることが出来るのである。斯様に觀行經断簡の威儀項目の総数二十五項中、その約半数に当る十二項目において兩經の一致を見出しうることは、とりもなおさず兩經の間に緊密な継受關係のあることを明瞭に示唆するものとなしえよう。

第二の改換の關係を示す最も適切な事例は、前掲対照表の(19)觀行經の「道士灑地有五事」と、これに対応する三千威儀の「掃塔地有五事」との間に求められる。即ち両者は対応する五つ条項を備えながら、その項目に認められる觀行經の「掃地」を三千威儀が「掃塔地」と作る相違のほか、なお「一者」にあつて觀行經の「不得背經」を三千威儀が「不得背佛」と作る相違が見出される。同じく「二者」にも、觀行經の「大掉手」を三千威儀が「不掉手」と作っているが、この点は前後に意を貫かず、恐らく後者の誤写に基くものであらう。ともあれ、この様に夫々対応する条項の間に若干の改換が認められるものには、このほかなお(9)(14)(22)(23)(25)などを挙げることが出来る。

ところで、こゝで改めて注意しておくべきことは、これらの各項目及び条項に見出される改換の範圍は、(19)の

事例の如く、極く一部の範圍に止どまるものゝように見えながら、実は觀行經の中に見出される他の多くの改換や缺略と緊密な關連を保っている事實であつて、即ち既に指摘した對照表(19)の項目に見出される「塔地」の改換は、對照表の(9)三千威儀の「教人破薪有五事」に規定される「四者不得妄破塔材」が、これに該当する觀行經の「道士教人破薪有五事」⁽¹²⁾において「四者不得妄破家材柱」と作られている事實、或は第一類に挙げた(16)の項目において、三千威儀の「掃塔下有五事」が觀行經にあつて「道士掃觀中有七」と改換されている事實などと密接に連なるものであり、また同じく(19)の「一者」に認められる「佛」と「經」との改換も、對照表(17)の三千威儀「大比丘僧會時、掃除講堂中有七事」中に規定される「三者當掃拭佛像去宿花」が、これに該当する觀行經「諸道士應聚會有五事」中において「三者拭案檢」とされ、同じく「四者當燒香佛前」が單に「四者當燒香」とされる省略や對照表(3)の三千威儀「鉢泥僧摩波利有十五德」中の「佛」の字を含む「一者用佛故」及び「七者當知佛事」の二條項が、觀行經の「道士為衆知事人有十二事」中において削除されている事實、更には對照表に掲げることとを省いた三千威儀の「拭佛像復有五事」の規定全部が、觀行經に缺脱している事實⁽¹³⁾とも、秘かに相應するものなのである。

斯様に見てくるならば、先に例証として指摘した(19)に認められる兩經の相違は、部分的に如何に僅少な範圍に止どまるにもせよ、それは決して單なる偶然的な誤脱や、不用意な改変によつて生じたものではなく、根本的には仏教と道教の間に横たわる教理・制度・儀禮・慣習の相違を背影して、いわば必然的に出現したものであることを示唆するものゝようである。恐らく觀行經或は三千威儀(それが前者であることは行論の進むにつれて確かなものとなる)の一方が他方を採つて剽竊を行うに際して、自から当面せざるをえなかった敍上の如き兩教間の相違を、巧に調整するために措置した統一的な改変の跡と見做すことが出来よう。併しながら、かくの如き改変の加えられる具體的な理由について、こゝで逐一論及する紙幅の余裕がないので、既に問題としてきた三千威儀中「佛(像)」の字を含む

一切の条項に対して、観行経が常に何等かの改換又は削除を加えている事実に拠って、一言所見を述べて置こう。

顧るに後漢以来、仏教々理と密接な交渉を保って発達する道教々理の發展過程において、既に六朝中期以来、「佛」をもつて「道」に對置する思想が出現し、「道則佛也、佛則道也」(弘明集卷七 所引夷夏論)の理念が、道教内部に行われてい

たにも拘らず、観行経の撰者が「道」を以て「佛」に換置する偽撰道経の常套手段を、敢えて用いなかった所以のものは、道教々団における天尊像礼拝の信仰儀礼が、当時未だ確立されていなかったことによるものと推定される。

こゝで天尊像信仰の沿革について深く立入ることは避けるが、元來道教の天尊とは道家の所謂「道」を神格化したものであり、道教の所説によれば「元始天尊、先天地生、有氣十方、成就萬象」(太極真人説二 十四門戒經)するものである。従つて「道本氣也、無像可圖」(黃弘明 集卷五)とされ、「天尊不含有形明矣」(甄正論 卷上)と云われる所以があるのである。然るに、

それにも拘らず後世天尊像の出現を見るに至るのは「近世道士、取活無方、欲人歸信、乃學佛家制立形像、假號天尊」(辯正論卷六 所引三教論)ものに過ぎないとも云いうるのであって、茅山派の祖師とも稱すべき宋の陶弘景が「在茅山中、立佛

道二堂、隔日朝禮、佛堂有像、道堂無像」(甄正論 卷六)と伝えられる堂宇の形態を採っている理由も、またそこに求められよう。而して天尊像の造像及び祭祀の儀礼が制度的に確立される時期は必しも明らかではないが、その制定を確

認せしめる最初の資料は、隋代の成立と推定される洞玄靈寶三洞奉道科戒營始であることから推して、北周以前に溯ることは困難であろう。かゝる天尊像信仰の経緯を顧るならば、観行経に認められる叙上の如き改換の措置を、天尊

像信仰の未確立に基くものと見做す先の推定が、根拠のないものでないことが明らかとなろう。ともあれ、この(19)によって窺見した改換の事例に属すべきものとしては、このほか(9)(14)(22)(23)(25)を挙げることが

出来る。次に同じ第二類の節略の關係について述べる順序であるが、既に引用せる(17)の「四者」に適例を求めらるので改めて、挙示することを避けるが、観行経において三千威儀の「當焼香着佛前」の規定が、単に「當焼香」と

され、「着佛前」の三字が節略されている理由は、先の改換の場合同様、天尊信仰の未確立に由来するものとして考え差支えあるまい。なおこれと同じく省略の關係を含むものとして、更に(21)(22)を加えておく。以上第二類として指摘してきた兩經間の僅少な相違、即ち改換及び節略の事例は、何れも道仏兩教団の教理・制度・儀礼・慣習の相違を背景として発生した改変の跡と見做しうるものであり、こゝにも觀行經が三千威儀の剽竊によって成立したものであることを窺う更に有力な材料を求めうるであらう。

次に第三類の關係を、前掲対照表の(3)觀行經の「道士為衆知事人有十二事」と、これに該当する三千威儀の「鉢泥僧摩波利有十五德」及び続く「復有十五德」の諸条項の間に求めて比較するに、まづ三千威儀の三十ヶ条項が觀行經において僅か十二ヶ条項に整理されている点が注目を引く。併しこれは單なる省略や削除の手段によって行われたものではなく、概ね煩雜なる条項の要約に基くものであることは注意すべきであつて、即ち觀行經の「二者惜衆物」、は三千威儀の「四者當惜比丘僧物」「五者當惜招提僧物」及び「六者當惜此丘僧物」の三条項を要約したものと見做され、また觀行經の「三者當知衆事」は三千威儀の「八者當知招提僧事」及び「九者當知比丘僧事」を要約して居り、更に「四者不得以法物廻衆用」は「十者・十一者」を、また「七者」に至っては三千威儀「復有十五事」の「三者・四者・五者」を、同じく「八者」は「六者・七者・八者」を要約しているのが認められるのである。併し觀行經に缺けている三千威儀の諸条項が、総べてこの要約の手法によって削除されているのではなく、既に指摘した如く対照表(3)において「佛」の字を含む「一者・七者」、及びその他の四条項が完全な削除を被っているのを見る。所謂第三類にはこの様な削除の例が少なくなく(1)(4)(5)にも若干見出される。就中著しいのは(5)觀行經の「道士於竈下有十九事」と、これに対応する三千威儀「竈下有二十五德」の間であつて、觀行經は三千威儀の「一者・九者・十者・十一者・二十一者・二十三者」の六条項及び「二者」の一部を缺略している。この事例につい

て削除の理由を推すに、削除を被る七条項に共通する要素は必ずしも求め難いが、比較的著明な傾向として注目されるのは、「一者」における「鉢泥僧」、「九者」における「達嚩」、「十一者」における「檀越・鉢泥僧」などの梵文音訳語⁽¹⁶⁾並びに「二者」における「佛法」の如く道教においてそれに換わるべきものを求め難い仏教独自の語句を含む条項の多いことであり、若し観行經が剽竊によって成るならば、三千威儀における仏教々団固有の語句は、当然經中に削除を被るであろうと云う、あらかじめ懷かれる当初の予想が、これによって裏付けられることとなる。

一方、かかる傾向とは全く逆に、観行經断簡中には、三千威儀に対応する条項の無い道教独自の規定は全く無いに等しく、僅かに対照表の(7) 観行經「道士使人市買有九事」の「六者」以下の五条項が、構成上これに対応する三千威儀の「買肉有五事」とやゝ異なり、買肉に関する規定が市買に関する一般的規定に改変されているのを見出すに過ぎない。本節の冒頭において予め除外した唯一の事例が即ちこれである。ちなみに、三千威儀に買肉に関する規定を存することは必ずしも不思議ではなく、律藏中に比丘の食肉を全面的に禁ずる戒律は存在しないのみならず、たとえ一定の制限があるにもせよ、獣肉及び魚肉の食用は容認されている⁽¹⁷⁾。梵網經の所謂大乘戒に佛子の一切食肉を禁ずる禁戒のあることは今更云う迄もない事実であるが、梵網經には中国偽撰と見做すべき極めて濃厚な疑義の存することとは人のよく知るところであろう⁽¹⁸⁾。これに反して、道教の根本戒律とも見做すべき太上老君經律の老君説百八十戒中は、明確に道士の食肉を禁止しているのであって、かくの如き両經の關係は、強いて云えば第二類改換の範疇に属せしむべきものであろう。それはともあれ、以上に指摘せる注目すべき二つの契合する事実は、観行經に認められる第三類の缺略が、実は三千威儀を剽竊せる観行經の撰者が、原本の三千威儀に対して加えた選択、即ち要約及び削除の跡に外ならないことを明らかに物語るものと云うことが出来よう⁽¹⁹⁾。

む す び

敍上、神人所説三元威儀觀行經と大比丘三千威儀の諸条項を比較対照し、両者の間に見出される基本的な諸關係について、具体的な分析と検討を進めてきたのであるが、その結論として、觀行經は三千威儀を剽竊し、これに若干の部分的な改変即ち改換・節略・集約・削除を施すことによつて偽撰されたものであると判定することが出来るであらう。而してこの觀行經が空しく敦煌の僻地に埋もれ、遂に道藏に収録されることなく散逸し去つた所以も、その余りにも大胆にして無恥なる剽竊の事実と無關係ではなかつたものと憶われるのである。

×

×

×

なお紙幅の都合上、併せ述べるべき兩經の成立に関する考察を割愛せざるをえなかつたので、最後に一言これに関する所見を補つて擱筆したい。まづ觀行經の成立及び断簡書写の年代は共に不詳であるが、断簡の書体は初唐、遅くとも中唐を降らざるものと見做され、その成立は大体北周末より隋に及ぶ間と推定される。⁽²⁰⁾ また三千威儀の訳出については、後漢の安世高を訳者とする従來の通説は誤りであつて、失訳ながら道安録以後、出三藏記集の編纂に至る間、即ち五六世紀交替の頃の訳出と見做することが出来るようである。いずれ稿を改めて詳説の予定である。⁽²¹⁾

註

- (1) 重刊道藏輯要(成都二仙庵刊) 総目 凡例十六則 第十三・十四紙。
- (2) 集古今佛道論衡 卷丁(大正大藏經 第五十五卷 三九二頁 下段)
- (3) 望月信亨「佛教經典史論」 二九九頁以下参照。

- (4) 禮記中庸 第三十一 「大哉聖之道、(中略) 優優大乎、禮儀三百、威儀三千、待其人、然後行」。猶このほか禮記に四箇處、詩經に十箇處威儀の語を見出す。
- (5) 釋氏要覽 卷下 (大正大藏經 第五十四卷 二九八頁 下段)
- (6) 太上黃籙齋儀 卷五十二 第二十紙 (道藏 洞玄部 第二七六冊)。このほか洞玄靈寶玄門大義 (道藏 太平部 第七六〇冊) は「威儀者、如齋法典式請經軌儀之例是也」と釋し、道教義樞卷第二・雲笈七籤卷六も、これを襲っている。
- (7) 拙稿「金真清規責罰榜考」(文化 第二十二卷 第五号)
- (8) 道藏闕經目錄 卷上 第八紙 (道藏 正乙部 一〇五六冊) 同書目末尾に「至元十二年、歲次乙亥九月望日」編纂なる旨を記しており、従つて觀行經が南宋末頃には、既に散逸していたことが知られる。
- (9) この点については Lionel Giles: *Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tun-huang in the British Museum*, London, 1957. P. 220. にも何等触れるところはないが、次の如き參考すべき解説を加えてゐる。
 三元威儀觀行經 Shen jen so ohuo san yuan wei i kuan ching, ch. 2. A Taoist sutra, torn, and first holed, very good MS. Yellow paper 10ft. S. 5308' なお、ペリオ將來 敦煌文書中に觀行經が存在するか否か、未だ明確に突き止めてないが、今後の調査の進展に俟つ外はない。
- (10) 拙稿「敦煌出土神人所說三元威儀觀行經斷簡補訂」 近刊 (福井康順博士頌壽紀念宗教論集收載)
- (11) 図版第一 上葉 四行目。及び前註 (10) 所掲拙稿を参照されたい。
- (12) (15) 前註 (10) 所掲拙稿を参照されたい。
- (13) 拭佛像復有五事 (大正大藏經 第二十四卷 九二三頁 中段) 「一者當堅持。二者常拭令淨。三者不得以手摩近面目羅手指。四者當自出錢買花。五者當布與人令散佛上」の五条項を欠脱している。
- (14) 続稿「敦煌出土神人所說三元威儀觀行經斷簡考」(仮題) において、天尊像信仰の成立、及び三元思想の展開について論及する予定である。
- (16) 「鉢泥僧」については梵巴ともに原語不明。しかしその実体は僧伽の雜用に任ずる下級僧侶の如く思われる。「達嚩」は梵語の *Dakṣiṇa* であり、翻譯名義集 (卷五) によれば「此云財施、解言、報施之法、名曰達嚩」と云う。また「檀越」は梵語の *Dānapati* であり、辯正論 (卷八) には、「檀者西域之音、此地往翻名為施、越者度也、若能行檀、當度生死、故云檀越」と説明している。対照表 (22) に檀越を主人と換置している例があるが、続いて辯正論が「比見道士亦呼俗人

為檀越優婆夷、據何典籍、以為此喚」と非難しており、また集古今佛道論衡（卷丁）李榮の言にも「道士語稱檀越、已竊僧言」と述べており、檀越を主人と換置するのは蓋し例外と見做すべきであろう。なお三千威儀の解説について西本龍山氏の御示教をえた。ここに記して謝意を表する。

(17) 長井真琴「南方所傳佛典の研究」二六六―二七二頁。

(18) 望月信亨「淨土教の起源及發達」特に一七一頁以下参照。

(19) 太上老君経律 老君説百八十戒 第四紙（道藏 洞神部 第五六二冊）「第二十四戒 不得飲酒食肉」

(20) 前註 (14) 所掲続稿。

(21) 前註 (10) 所掲拙稿。

附記

本稿は昭和三十四年五月、東北中国学会において行なつた研究発表の一部である。なお稿の成るに当って、東洋文庫、特に田川孝三氏より文献の複写その他について種々の御高配を忝くした。一言記して謝意を表しておく。

[PL. I]

道士教人待新舊道士何等第一者當
與舊道士者當與外真誠正者當給
燈火者當
七者當給燈火
道士使人市買有九事何等為九一者當教
買淨者二者當使役人三者不得差是役人
四者當獲人意
二消六者不得使
情賄賂七者不得因市別處遊行八者不得
以所買物買不淨處九者當念與人便宜
道士教人汲水十
并為五一者當使
先淨潔器二者當使有肩家三者當覆土令
淨四者不得持臟污五者若人以污不得度
道士教人破新
并為五一者當
道二者先規斧柄令堅三者不得破有
草薪四者不得去破家材柱石者當
道士教人擇米有五事何等為五一者當
量觀多少二者不得有草三者擇米

[PL. II]

四者不得使口
道士至舍後者廿五事何等若於中其
大小便當行二者行時不得通氣其
為上堂作礼亦勿受人礼三者住時當直住
顧視地四者住當三警嗽五者上已有人嗽
不得進六者已上而警嗽乃踞七者面牆中
八者不得一足前一足後九者不得令身倚
十者敝衣不得使垂周中十一者不得大咽
使面赤十二者當直相前不得顧聽十三
者不得掌地十四者不得低頭視國中小事
者不得視陰十六者不得以手持陰十七者
不得畫地住字十八者不得以草畫卦結步
十九者用水不得大背廿者用水不得得滿
廿一者用水不得以前手若提手廿二者用
土當三過廿三者當月凍反廿四者三過水
廿五者說見水草土畫當誦直日主者若
自手取焉甚